

平成25年度

第58回 長野県中学校連合教科研究会

# 英語科

## 目次

I	研究テーマ	2
II	研究の趣旨	2
III	参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名	2～4
IV	研究問題と協議内容	4～14
V	本年度研究会の反省と来年度の方向	14～15
VI	あとがき	15

## I 研究テーマ

「コミュニケーションの基礎を養うための授業の構想化と評価のあり方」

## II 研究の趣旨

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を総合的に育成するための場面設定や評価方法について具体的に学ぶことができるようにしていく。学習指導要領を踏まえての年間の指導計画の検討、小中の連携についても考えていけるようにしていく。

## III 参加校テーマ一覧と参加者氏名・指導者氏名

### 第1分科会

指導者	田中 幸一 先生	(南信教育事務所指導主事)
司会者	宮澤 修一 先生	(長野市立柳町中学校)
記録者	笠川麻由香 先生	(長野市立篠ノ井西中学校)
世話係	津金 俊文 先生	(附属松本中学校)
中学校名	研究の要旨	氏名
佐久中学校	レポートなし	平林 愛
真田中学校	相手意識に立ち、話したことをもとに正しく書いて伝える力をつけるための指導はどうあったらよいか	中澤 容子
西箕輪中学校	自分の意思を適切に伝える自己表現力を高める指導と評価はどうあったらよいか	牛山 翔太
豊丘中学校	自分の考えを、まとまりのある英文で書いたり話したりして相手に伝える力を高める指導はどうあったらよいか	塚田 理行
柳町中学校	場面に応じて既習表現を適切に選択し、自分の考えや気持ちなどを伝える力を育てる指導のあり方	宮澤 修一
篠ノ井西中学校	レポートなし	笠川麻由香
広徳中学校	レポートなし	小林 裕季
附属長野中学校	一貫した内容になるように文をつないでいく力を高める指導の在り方	橋爪 祐一
会田中学校	身近なことや自分の考えなどを相手に正しく伝え合う力を育てる指導のあり方～相手を意識し、4技能すべてを使う総合的自己表現活動の指導～	百瀬 薫
附属松本中学校	会話を通して互いの考えや気持ちを理解し、伝え合うことに喜びを感じる英語の学習	津金 俊文

### 第2分科会

指導者	細江 洋司 先生	(東信教育事務所指導主事)
司会者	飯島 廣樹 先生	(長野市立三陽中学校)
記録者	上野 大 先生	(佐久市立野沢中学校)
世話係	矢野 司 先生	(附属長野中学校)
中学校名	研究の要旨	氏名
野沢中学校	レポートなし	上野 大
岡谷北部中学校	既習表現を用いながら、自分の考えを表現する指導のあり方	竹内 大輔

小諸東中学校	コミュニケーションのための基礎・基本の定着を図る指導のあり方 ～語と語のつながりに注意して正しく英文を書く指導を通して～	天野孝太郎
富士見中学校	習得してきた英語を活用してコミュニケーションできる生徒を 育む指導の在り方	平出真由美
堀金中学校	レポートなし	遠藤 太紀
明科中学校	自分の考えや気持ちを相手に伝えるための表現力の育成	角田 仁美
柳町中学校	場面に応じて既習表現を適切に選択し、自分の考えや気持ちなど を伝える力を育てる指導のあり方	山口 千絵
三陽中学校	レポートなし	飯島 廣樹
附属長野中学校	一貫した内容になるように文をつないでいく力を高める指導の 在り方	矢野 司
附属松本中学校	会話を通して互いの考えや気持ちを理解し、伝え合うことに喜 びを感じる英語の学習	坂口 俊樹

### 第3分科会

指導者	桐井 誠 先生 (南信教育事務所指導主事)	
司会者	嶺村 岳 先生 (白馬町立白馬中学校)	
記録者	佐藤 大樹 先生 (上田市立第二中学校)	
世話係	矢島 裕文 先生 (附属松本中学校)	
中学校名	研究の要旨	氏名
上田第二中学校	レポートなし	佐藤 大樹
諏訪中学校	既習表現や「つなぎ言葉」を用いて、伝えたいことをより広げ て話す指導のあり方	神津 明夫
伊那中学校	既習表現や新出表現を用いて、話すことを通して自分の考えや 気持ち、事実など伝えたいことを相手に正しく伝わるようにす るための指導はどうあったらよいか	遠藤 葉
福島中学校	学んだ表現を定着させるための指導はどうあったらよいか	齋藤 有希
白馬中学校	レポートなし	嶺村 岳
仁科台中学校	基本的な単語や文型を用いて、自分の思いや考えを表現できる 生徒を育てる指導	阿藤 茜
附属長野中学校	一貫した内容になるように文をつないでいく力を高める指導の 在り方	小栗 千佳
丸ノ内中学校	レポートなし	坂井 洋子
梓川中学校	場に応じた既習表現を選択し、使用できる力を高めていく指導 の在り方	内田 昌宏
附属松本中学校	会話を通して互いの考えや気持ちを理解し、伝え合うことに喜 びを感じる英語の学習	矢島 裕文

### 第4分科会

指導者	清水 秀明 先生 (北信教育事務所主任指導主事)
司会者	西村 晃洋 先生 (長野市立広徳中学校)

記録者	高見澤益子 先生 (千曲市立埴生中学校)	
世話係	木下 耕一 先生 (附属長野中学校)	
中学校名	研究の要旨	氏名
小海中学校	・生徒が互いに学び合い、高めあうグループ学習 ・学習したことを自信を持って表現できる生徒の育成	畠山 裕紀
南箕輪中学校	教科書の読み物教材のあらすじや大切な部分を、仲間と考えをだし合いながら正確に「読み取る」力を伸ばす指導のあり方	宮下 誠士
春富中学校	一人ひとりが楽しく深く追究する授業の創造 ～学び続ける生徒と教師～	松崎 陽輔
宮田中学校	レポートなし	荒瀬 陽子
埴生中学校	レポートなし	高見澤益子
高社中学校	英語の基礎力を身につけ、友だちと関わり合いながら、生き生きと表現活動に取り組める生徒を育成するための指導はどうあったらよいかー特に話すことー	田中 沙織
櫻ヶ岡中学校	レポートなし	龍野 雄祐
西部中学校	聞いたり読んだりしたことをもとに、英語で表現していく力を高める指導のあり方	高木 淳
広徳中学校	レポートなし	西村 晃洋
附属長野中学校	一貫した内容になるように文をつないでいく力を高める指導の在り方	木下 耕一
附属松本中学校	会話を通して互いの考えや気持ちを理解し、伝え合うことに喜びを感じる英語の学習	丸山 葉子

#### IV 研究問題と協議内容

##### 【第一分科会】

##### 討議題1 『考えや気持ちを伝え合う』

- (1) 教師が音声で3人称を用いたモデル文を示し、自分の紹介と比較しながら3単元の導入を行った。その後、グループ編成を工夫してアクションカードという活動を行った。競争的な活動を取り入れることで生徒たちの意欲を喚起することができた。(会田中)
- (2) 『書くこと』に重点を置き、年に数回、英作文の作品を廊下に掲示している。本時では、ペアで先生方にインタビューをする活動を設定し、同じ動詞を使わないという条件で情報収集したことを基に先生方の紹介文を書かせたことで、生徒が意欲的に書く姿につながった。(真田中)
- (3) 教科書本文から、文と文の関連性などを分析させ作成した『文のやくわりリスト』を参考に、『カテゴリーシート』に自分の経験した出来事を書かせた。その後、グループで文構成に着目して助言し合い、『カテゴリーマップ』を使って個人追究することを通して、文と文のつながりに注意した相手に分かりやすい「夏休みの出来事」を書く力につながった。(附属長野中)
- (4) 課題把握を大事にしている。写真を示しながら、英語で何を伝えたいのかをはっきりさせた上で表現する活動を行っている。教科書の本文の内容や基本文型・表現に習熟させながら、それに基づいて自己紹介文を書くなどの活動につなげている。(豊丘中)
- (5) 担任の意外な一面をモデル文から知る場面を設定することで、生徒同士が互いの休日の過ごし方を知りたいという願いや意欲が持てるように考えた。具体物を持ち込ませ、対話活動を互いに評

話し合いながら繰り返すことで、うなずきや聞き直しなど会話を継続しようとする姿が見られた。(附属松本中)

助言者の指導：

- (1) 三単現の文を一人称の文と比較しながら、その違いに気づかせていく指導が参考になる。その際、言語の使用場面を明確にした上で、意味を類推させたり言語形式に気付かせたりしていくことが大切である。(Focus on Meaning や Focus on Form の視点を大切に)
- (2) 書く力を付けることが目的だから書く活動だけを行っていけばよいのではなく、音声中心の練習をふんだんに取り入れていることが参考になる。3人称単数の s などの文法事項は短期間で身に付くものではない。1時間だけでその定着を評価してしまうのではなく、複数の単元を通して言語活動を繰り返す中で、着実に言語材料の定着が図れるように指導計画を立てたい。
- (3) めざす姿を明確にした単元構想が大変参考になる。「カテゴリーマップ」等を用いることで、表現に至るまでの生徒の思考・判断の過程を可視化している。また、グループ活動でも、ただ単に生徒同士で助言し合うのではなく、友達の助言を受け入れる、受け入れないということを、根拠を持って自己選択・自己判断させていることが大切な点である。また、単元終了後に授業アンケートを実施して指導改善につなげていることも参考にしたい。
- (4) どの程度のまとまりのある英文が書ければよいかを教師が明確にイメージして、教科書本文の内容と2つのビデオのモデル文から、文構成や表現に気付かせていった指導が参考になる。ただし教師の示すモデル文の完成度が高過ぎると生徒の気付きを引き出すことが不十分になることがある。日頃から教科書を読んだ感想を一文書くなどの積み重ねをしていくことが大切。
- (5) 必要感や意欲を持たせる場面設定や、実際に具体物を持ち込んで show and tell を行うことで伝えたり聞いたりする姿が高まっている。また単元の中に、問い返しや相づち表現を理解したり練習したりする時間が位置付けられていることが参考になる。さらに思考・判断する過程をどう評価していくか、またそうした評価をどのように蓄積し総括していくかを研究していきたい。

## 討議題2 『話す力を高めるための手立て』

- (1) 話し手の伝え方で聞き手の理解度が違うことをモデルから気付かせ、自分の伝えたい部分に記号や印を付けさせる等の工夫で、伝えたいことを強調して話したり、相手の話をしっかり聴こうとしたりする姿が見られた。グループで助言することでスピーチ文は豊かになるが、互いの内容を何度も聞くことになるのが課題である。3人グループは有効であることが分かった。(柳町中)
- (2) スピーチで大切にしたい視点を、声の大きさ、適切な速度、強弱、アイコンタクト、ジェスチャーにして、読み方を3人グループで互いに聞き合い評価し合う活動を通して、「夏休みに体験」についてまとまりのあるスピーチ文を書き、分かりやすく発表するができた。(西箕輪中)

助言者の指導：

- (1) 話し手と聞き手の双方の視点から、めざす姿、付ける力を決めだして実践していることが参考になる。話す力を高めるための手立てとしては視聴覚機器の活用も効果的である。例えば、ある小学校の実践では、リズムーナという50種類程の音色が出てスピード調整も自在にできる機器を用いて、チャンツ等の口慣らしの活動を行ったり、インタビュー活動のBGMとして流したりすることで、児童の英語表現のリズムや声量が改善され高まっていった。
- (2) スピーチ文の中のどんな内容を特に伝えたいかを明確にし事前にグループで共有させたことで、生徒同士での評価活動が機能していった点が参考になる。ただし、評価の観点が多かったため、

例えば、自分はどんな内容を表すためにどんな技法を中心に練習したかについて共有したり、その視点からどうだったかを互いに振り返らせたりしていくことが考えられる。

### 討議題3 『英語指導上の課題』

- (1) 提出ノートをどのように課したり工夫したりしているか。(真田中ほか)  
提出回数やページ数だけで評価するのではなく、本時の復習、次時の予習などを課題として行っている。また毎日取り組ませながら、授業のある日のみに点検をしている。(柳町中ほか)
- (2) 現行のCSになってから、扱う単語数が増えてきたことで、授業での新出語彙の扱いをどのようにしていけばいいか。(会田中ほか)  
新出文法を導入した後のコミュニケーション活動などで、新出単語を取り入れて扱うようにしている。(篠ノ井西中ほか)

助言者の指導：

- (1) 理解可能な英語を多く聞かせる機会を小・中・高とつないでいくために、教師は音声面を大切に、生徒の実態把握により、既習レベル+類推すれば分かる程度の英語を多く使って授業を仕組んでいきたい。
- (2) 失敗や課題から学んでために気付きを促す支援をこの1時間でわかったことを、教師が単にまとめるのではなく、生徒が自分でノートやワークシートに整理していく活動を位置付けたい。自学自習できる自立した学習者を育てたい。
- (3) 既習事項を繰り返したり積み上げたりしていける工夫を例えば既習事項が掲示されたりファイル等でいつでも確認できるような工夫をしたりしていきたい。
- (4) 生徒の英語力の捉え直しを「低位生」という見方は避けたい。Slow learners と捉え、何が得意なのか何が不得手なのかを吟味しながら個に応じた手だてや指導計画を作成して支援していきたい。今後も信念と創造性をもち、こうした情報交換を大切にして、生徒達のために共に尽力したい。

### 【第2分科会】

#### 協議題1 多様な子どもたちに対してどのような授業・支援ができるか

- (1) すべての生徒が活動のねらいを達成できるようにするために、板書を工夫し、イラストと文章を結びつけながら会話の流れと役割交代が分かりやすいようにした。さらに、通級で学んでいる生徒には、カードを用いながら個別支援を行った。「このときはこう言う」ということがはっきりしており、最初に教師と何回も練習したため、普段コミュニケーション活動のときにはうずくまってしまうその生徒も友と活動することができた。しかし、その生徒だけに目を向けていて、他の配慮すべき生徒に支援が行き届かなかったところもある。また、表現を工夫し、自由度を上げていくためにはどのようにすればよいか、説明を少なくして活動の時間を確保するためにはどうすればいいか。(明科中)
- (2) すべての生徒が what+名詞 do you like?の語順を書くことができるように授業を仕組んだ。希望献立を題材に、質問したことを後でワークシートに書くようにしたところ、すべての生徒が書くことができた。また、見とどけの活動としてALTの先生に誕生日プレゼントを買うためにALTに聞く質問を書かせたところ、すべての生徒が一文以上書くことができた。しかし、

A L Tの先生に質問するときは、ひねった質問を考え、何回も聞きに行く姿があったが、学びの早い生徒にとっては退屈な授業となってしまったかもしれない。多様な子どもたちに対応する授業にするためにはどうすればよいか。(小諸東中)

### <指導者の先生のご指導>

- (1) レポートの「すべての生徒が」というところ、みんなを分からしてあげたいという気持ちが感じられた。特別な支援を必要とする生徒に寄り添うことが他の生徒にもよい教育になるのではないか。
- (2) 本時案について、「やってみたい」という生徒の意識から **Today's Goal** を設定したことがとてもよい。活動の説明については、活動が多すぎないようにすることが大切。予定したことができずに終わってしまう授業が多い。**Today's Goal** の設定で生徒がやる気になれば、生徒が自分たちで進めていく。方法として、モデルを示すということが1つある。対話文を覚えることと、活動をすることのどちらに比重を置くかも大切。
- (3) 定期テストや各種調査から子どもの実態を見極め研究を出発している点がよい。研究の日常化ということにおいても大切にしたいところ。
- (4) チャンスはこれから主体になっていくのではないか。外国語活動でも経験しているため、子どもたちも入っていき易い。
- (5) 小諸東中の見とどけの活動は、数学でいう一般化になる。同じ言語材料を使って別の場面でやらせてみることも英語科においても必要な視点になる。授業展開がスムーズで、説明もスムーズな授業であった。子どもだったら、という視点をもっているからこそできたことではないか。どこに合わせて授業をするのか、ということについては難しいところ。学習集団の中で大勢を占めている層に照準を合わせ、そこに当てはまりにくい子どもには特別な支援をする、という考え方もある。また、学び合い、早く終わった生徒は教えても良い、という関係をつくる。ただ、答えは教えない、手がかりを教える、ということを経験を掛けて徹底する。

### 協議題2 会話を続けていくための教師の支援や英語科の学習について

- (1) 毎日の帯活動でやっている **small talk** では、写真で見せたものに対して時間を決めて会話を行ってきた。しかし、日本語を使ってしまったり、英語で表現できていなかったりする場面が見られ、きちんと会話について型を作る必要があると感じ、「会話の型」を考えるために特設単元を組むことにした。会話を続けていくために、聞く側が質問するタイミングをつくり、その表現の仕方を練習したりした。同じように、聞き返しや、反応も扱い、英語だけで会話が続いていくためにはどうすればいいかを追究した。型があることで生徒も会話が続くようになり、5分もできる生徒もいる。しかし、同時に文法的なミスも多い。**small talk** でどこまで求めていけばいいのか。(岡谷北部中)
- (2) 会話する喜びを味わうための英語の学習。休日にしていることを題材に、まず教師3人が自分たちが休日にしているものにかかわる具体物を持ち込み、生徒に会話のモデルを示した。その中に、3単元の **s** や **does** を使った疑問文が含まれている。生徒も自分が休日にしていることに関わるものを持ち込み、まずはそれについて会話を行った。そして、会話ペアと相談ペアをつくり、友達について知ったことを他の友達に伝えるというレポーティング活動をした。会話の中で、会話が停滞してしまうことがあったが、会話を相手に譲ったり、家族についての質問

に話題を変えるなどし、会話の戦略をペアで考えながら続けていこうとする姿があった。正しさや適切さだけで評価すると厳しい生徒もいる。関心・意欲・態度の（ア）のみの評価でもよいのではないか。別の単元では、6人の外国の方に来ていただいて、会話をする場面を仕組んだ。初めに会話をしたときは、どうやって伝えたらいいのだろう、何を言っているのか分からない、という経験をした。そこから数時間かけて知りたい表現を調べたり、会話の作戦を立てたりした。実際に会話をするときは、作戦メモをもち、予め質問に対する答えや答えに対する質問を用意しておいた。（附属松本中）

- (3) **key word catcher** を用いての会話の継続を考えている。**key word** をつかみながら、それをもとに次の質問をし、相手の情報を引き出しながら問答を続けていく。質問し、それに答えてもらうことが自分の学びにつながっていく。はじめは5W1Hで聞いていって、キャッチしたものでより深く友達のことを聞いていく。キャッチしたものをもとにして、最終的に、友達紹介文をつくる。（附属長野中）

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 子どもは英語で会話を続けることが楽しい。外国語活動では **Response** を大事にしていく方向が打ち出されている。**Really** や **Me, too**, などの表現を積み重ねていくことが大事。徹底的にQ Aの練習をしているクラスは、10数分間生徒だけで英語の会話をする事ができていた。話題がよかったことと、間違えても良いという姿勢がある。音声面でどんどん表現を入れていきたい。小学生の姿を見ると、英語で活動できる子どもとそうでない子どもの違いは、英語の表現に慣れ親しんでいるかどうか大きくかかわっている。英語を使っている生徒をどんどんほめていく。
- (2) 持ち込みということがよい。目的とルールを明確にした上ならどんどん持ち込んでいってよいのではないか。

#### 協議題3 正しい語順や相手に分かりやすい表現で書くための指導のあり方

- (1) 口頭練習を繰り返すことで、定着をはかり、正しい語順で言えるようにしている。さらに、最後に書く時間を設けることで、話したことと書くことが結びつくようにしている。口頭練習の方法として、単語一語から質問文全体を連想する練習や、答えに対して質問文を考えるようなドリルを考えて行っている。（小諸東中）
- (2) 姉妹都市であるリッチモンドの学生に自分の町を紹介するための単元を組んで行った。モデル文を提示し、それに沿って自分の好きな場所を決め、ライティングをした。重要なのは場所選びであった。中には、教科書の表現を応用して英作文をしている生徒がいた。そのような教科書での蓄えを実際の英作文に生かしていくことができれば、すごい可能性になる。ただ、難しい表現をそのまま使おうとしている生徒がいたり、日本語をそのまま英語に訳そうとしたりする生徒がいる。どう指導していけばよいか。（富士見中）

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 生のコミュニケーションの場はやはり良い。相手と目的がはっきりし、それによって言語材料のねらいもはっきりしてくる。最終的に生徒がこんな英語を書くだろうということを想定して、どのような既習事項が使われていくのかを吟味する必要がある。早く活動が終わった生徒の支

援も指導案にありよい。

- (2) 英文を書く上での手立ての1つとして、言い換えや、細かく分ける、というものがある。また、モデル文を活用すると日本語を介さないで英文にすることができる。教科書に出てきたものをいかに引っ張ってくるのかということも考えたい。リッチモンドでは **People do not have to put off shoes.** だけど、日本ではどうなのか、という視点で考えれば、日本語を介さなくてもできる。
- (3) 佐賀県では、ペアでQAを作って質問し合う、ということ必ずやっている（佐賀メソッド）。このとき、書かずに音声のみで行うことを徹底している。では、教科書にある比較的長い **Use** や **Reading for Communication** の音読をどのようにしていけばよいのか。全部を音読するのではなく、**summary** のみを読ませるということを実践している先生もいる。

#### 協議題4 伝えたいことが伝わるためのスピーチの工夫

- (1) 必死になって読むのが精一杯な生徒がいる。そのために、抑揚を目で見えるようにしてみた。自分の伝えたいことが分かる読み方にするにはどうすればよいか。また、聞き手はどこを聞き取ったらいいのか。聞き手のスキルも大きい。（柳町中）
- (2) 聞き手をどう育てるかということが大切であるが、「静」の状態なので難しい。授業ではかなりゆっくりしゃべったり、覚えてほしい表現は繰り返したりしている。「教師の2通りのモデルを聞き」ということはとても大事なことで、教師がおかしいと思うモデルを示すことも有効な手だてになる。実際にゆっくり、強い読み方で示したが、そういうところで聞き手あつてのスピーチということが身についていく。（附属松本中）

#### <指導者の先生のご指導>

- (1) 単元の目標を考えるときに、言語材料ばかりではなく、言語活動を中心に考えたい。また、観点を絞ることも大切である。国立教育政策所の資料を見ても、単元の評価規準の設定の際に、「この単元では評価しない」というものもある。評価に関わっては、**Lesson Goal** を大切にしたい。
- (2) ALTがいると、英語で伝えるという必然性がある。また、**Today's Goal** 達成の見通しをもたせるために、教師のモデルを使うことは有効。強弱をどこにつけるか、みんなで考えることもできる。強く読むためには具体的にどうすればいいのか。生徒にとっては、それがはっきりわからないと追究の意欲がわきにくい。

（文責者 佐久市立野沢中学校 上野大）

#### 【第3分科会】

##### 討議題1 文構造・文法事項の扱い方や定着のさせ方

- (1) 対話活動の中で文構造・文法事項の定着を図るために、授業のはじめにペアトークを継続的に行った。「ペアトークのための表現集」を生徒に配布し、活動後の振り返りにも使用した。継続して行うことで英語が苦手だった生徒が、単語から文へ発話が広がるようになってきた。対話活動を行う中で文法事項が定着していく生徒の姿があった。（梓川中）
- (2) メモをもとに英作文や口頭練習など、授業の内容に即したドリル学習を継続して行った。1学年の三単現の学習では、校内の先生にインタビューをし、その結果について三単現を用いて紹介

文を書き、友に発表する活動を仕組んだ。紹介文を書く場面では、教師からモデル文を黒板に提示したことで～sの欠落など生徒が自ら気づき、修正して書くことができた。(仁科台中)

#### 〈指導者の先生のご指導〉

- (1) 英語を実際に活用する中で文法事項の定着を図る筋道は、子どもの立場に立っている。小学校で英語に慣れ親しんできている生徒なので、その態度を中学校でも継続させていきたい。対話の中で文型を使ってみて、振り返る段階で文法事項に気づくことも大切である。さらに、最後に対話の内容について再現して書くことなので定着を図っていきたい。
- (2) 文法事項を理解してから対話活動を行うことも大切なことであるが、対話活動で行う中で理解が深まる面を大事にしたい。「英語がうまくなってから街へ出る」ばかりでなく、「街へ出て英語がうまくなる」の考え方で。また、ドリル活動を行う際には様々なバリエーションで行うなど子どもに飽きさせない工夫をしたい。また、1時間の中で、単元の中で、1年の中で、3年間の中での構成を考えて、生徒にどのような力をつけるのか単元の目標、年間の目標をふまえて授業構成を再考してみしてほしい。

#### 討議題2 生徒の興味関心に応じた導入、及び題材や場の設定のあり方

- (1) 関係代名詞の意味用法を指導する時に、どのような場面で関係代名詞が使用されるのかが悩みであった。授業では関係代名詞 **who** を使って担任の先生を紹介する場面を設定し、生徒が興味を持って対話活動に取り組む姿があった。場面に合った表現方法で対話活動を行うことで、生徒に意欲・関心を持たせることができた。(諏訪中)
- (2) 生徒が **How many** を使って相手に聞きたくなる状況はどんな場面かについて考えた。**two apples** ……など絵を描いた紙を見せ、リピートさせていく中で、猫を15匹描いた絵を一瞬だけ見せて隠すと、生徒から「え？いま何匹？」という言葉を引き出すことができた。生徒が思わず言いたくなる場面を教師が作りだしたことで、その後の対話活動に意欲的に取り組めた。(伊那中)
- (3) 学校の先生の紹介で興味・関心を引けるように場面を設定した。知っている先生でも知らないことがたくさんあって、それらを人に伝える対話活動を行った。3年生の電子辞書に賛成か反対かという内容があるが、多くの生徒は電子辞書を持っていないため、話がわからず、議論にならなかった。生徒の実態に合った内容を精選したい。(仁科台中)
- (4) 三単現の学習で、単元のはじめに「先生が休みの日にこんなことをやっているの!？」と生徒が驚くような内容を紹介し、その内容を伝える導入場面を設定した。その後、友の休日の過ごし方について尋ね合う展開を行った。導入からスムーズに展開に進み、生徒の意識が自然と友の紹介文を書く活動に発展していった。(附属松本中)

#### 〈指導者の先生のご指導〉

- (1) 諏訪中学校での実践では、話すことだけを徹底するのではなく、諏訪市の紹介本を作ったり、ディクテーションや小テストなども行ったりしている。**Lesson Goal** を定めてその目標の達成のために、どのような活動や手立てを位置付けていくのかということが考えられている。また、小さな対話活動でも毎時間やり続けていくことで、話すことに対する抵抗感がなくなってくる。慣れてくるとそんなに奇抜なトピックではなくても、シンプルなテーマで会話そのものを楽しめるようになってくる。
- (2) 極端な話、教師自身がジャンプして、**I can jump** と導入する・・・など、新出表現の導入では自分の十八番の導入を持っているようにしたい。導入が1番の工夫どころかもしれない。その導

入方法については、子どもの実態やねらいに即したものを与えていきたい。「授業を英語で」の第一歩とも言える。

- (3) 指導案の中にある単元の目標の「Aコミュニケーションへの関心・意欲・態度」では「積極的に」という言葉を使うのではなく、例えば、つなぎ言葉を用いて対話をしようとしている、など積極的にやっている姿はどういうものなのかを具体的に書くようにしたい。最後に関心・意欲・態度の評価の観点がある単元展開が見られる。評価の配列が良いので参考にしてほしい。
- (4) 実践では子どもの願い・気持ちを大事にしている。教科書の題材ありきにしてしているのではなく、場面設定を工夫することで思考力・判断力・表現力をどう英語科に活かしていくかが考えられている。表現できるかできないか、だけの評価ではなく、書けない、話せない、でも一生懸命考えて、表現しようとしている生徒をどのように評価するのか、大事に考えてほしい。

### 討議題3 既修表現・新出表現の活用方法や文のつなげ方

- (1) 一貫した内容になるように文をつないでいく力を高める指導のあり方について研究を進めてきた。「カテゴリーシート」「文のやくわりリスト（事実+感想）」「カテゴリーマップ」など、細かな手だてを重ね、教師がよいモデルを示したり、教科書の文を基本としたりすることで、1つの話題についてまとまった英文を書くことができるようになってきた。（附属長野中）
- (2) 会話表現の力を高めるために、モデル対話の練習・暗唱・相づちの言葉リストの活用、3分トークなどを毎時間行っている。友よりもALTとの会話をすると表現が豊かなので、会話を続けることができる生徒が多かった。活動後にペアで会話文を書き起こし、生徒自身が文法的な誤りに気づくことができた。（木曾福島中）
- (3) 新出表現をどのように活用し、定着させることができるかが課題である。例えば How many ~? を学習する場面では誰が1番多く聞けたか、など競わせることで意欲を高めるようにすると、生徒も楽しみながら言えたり、答えたりすることができた。（伊那中）
- (4) 生徒がある出来事や人物について書かせる場面では、それらの伝えたいことについて知らないことがあるので、活動を行う際には事前に調べておくことが必要である。中身のある英文を書くために、事前に情報収集を行ってから、まとまりのある文章を書く活動に取り組んだ。

（諏訪中）

#### 〈指導者の先生のご指導〉

- (1) 附属特有の造語で分かりやすい。文と文に注目して、という視点を徹底している点が良い。課題としては、「少し書きにくかった」「完成した文章が単純なものになった気がした」という感想のように、自由度が低いので、最終的には自由に書いて、ここまで書けるようになってきたという姿にしたい。事実+感想 だけなので、「やくわりリスト」にこだわる必要はないと思われる。本当に必要な活動を精選し、授業の中で生徒の変容が見られるようにしていきたい。
- (2) 週末の予定を言い合う場面では、多くの生徒が楽しみながら英語で話し続けることができている。さらに会話のトピックをその時々で変えるとよい。話すことを継続していくことでテストでの力もついてくる。話したことについて書いて再現する、話したかったけど言えなかった表現を振り返って書くなどは、実感を持った定着・習得につながるものである。
- (3) 複数形を日本語でなんとと言い換えるか、何と説明するかなど、もう一度この説明の仕方を考えてみたい。ただし、日本語での解説や説明にとらわれすぎてしまうと、英語を教えているのではなく、英語について教えているだけになってしまうので気をつけたい。How many ~s のsだけに注目するのではなく、その後続く文章について注目させていきたい。

- (4) 教えるところは教えて、対話活動では数多く話させる、そのバランスがよい。また、それらの活動を続けていることが生徒の力となっている。1人の生徒のよい姿を大事にして、その生徒を中心として授業で様々な活動にチャレンジしていきたい。

#### 討議題4 対話活動のあり方(学年別工夫・統合的活動・単元展開・評価方法)

- (1) 「1hint型 What am I?」において、聞いたことを理解し、それに対する適切な答えを短い時間に考え、応答することが求められる。そのために、実際の活動を行う前に、回答者となる友がヒントをもとにどのような質問をするのかを把握する「Pre Talk」を位置づけ、活動の流れを捉えられるようにした。こうすることで実際の対話をより具体的に想定でき、より円滑なコミュニケーションに近づくことができるだろうと考えた。(梓川中)
- (2) 友との対話活動では、スキットのように事前に準備をするのではなくて、相手が何というか分からない中で、それに対して対応できる力をつけていきたいと考えている。生徒の実態としては、相手の話すことを予測できないときに会話がスムーズにできなくなるので、そうした時に相づちや繰返しなどを効果的に使い、対話を続けていけるようにしたい。友のラケットを紹介する場面で、1回目は紙を見てしまったり、相手の反応があまりなかったりしたペアが、その会話を見ていた友からのアドバイスをもとに、2回目はさらに会話を続けることができた。さらに振り返りを行い、3回目、4回目と続けていくと、自然に顔があがるようになり、もともとの原稿にはないやりとりができるようになってきた生徒の姿があった。(附属松本中)

#### 〈指導者の先生のご指導〉

- (1) カテゴリーを決めだし、Free Talk を継続的に位置付けていることが生徒の力を伸ばしている。活動前の Pre Talk などの小さな仕掛けが生徒の自信になっていく。指導案では予想される生徒の反応を大事にしている。評価項目では何が A 評価で、何が B 評価かなどが明示してあることや、目標に達しない生徒をどのように支援するかということが書かれていてよい。
- (2) 大勢の外国人が集まることのできる環境が良い。各学校では ALT を有効に使って、ALT との授業でどのような活動を仕組むか計画的に授業構想をしたい。さらに、ALT との授業がゴールではなくて、それらが手段となってさらに発展的な内容につながるようにしたい。
- 英語を使った「言語活動」と、日本語を使ったいわゆる「言語活動」の両面からのアプローチが大切にすることで、子どもの力は伸びていくと思われる。

#### V 本年度の反省と来年度の方向

項 目	内 容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマに広い意味が含まれているのでこの方向がよい。</li> <li>・「授業」というと、50 分間の授業を連想してしまうので、単元や年間における指導の在り方というニュアンスが入ってもよいのではないか。</li> </ul>

○研究の主な内容と研究の成果について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマの「コミュニケーションの基礎を養う」ための授業が、各校でそれぞれに焦点を絞って実践されてきている。</li> <li>・テーマにある「授業の構想化」「評価」にさらに重点を置き深めていけるとよい。</li> <li>・小中高の長期スパンでのコミュニケーション能力の育成を考えていく必要があるように感じる。</li> </ul>
○研究の方法や経過について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション能力を生徒につけるためにはどうしたらよいか共に学んでいきたい。</li> <li>・各校でそれぞれに研究を進め、各地区や各地方での発表を行ない、情報交換を図りたい。</li> </ul>
○研究会当日の運営について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各校の発表に多くの時間を割いたため、各校の研究について十分に検討する時間が少なかった。</li> </ul>
○研究集録等の Web ページ掲載について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・司会計画がアップされなかったことで、困られた先生もいたのではないかと。</li> </ul>
○本年度運営全般について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メールによるレポート提出などは、履歴として残るのでありがたい。</li> <li>・レポートの書き方の例があり分かりやすかった。</li> </ul>

◎来年度の方向

○来年度の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継続の方向でよい。</li> </ul>
○来年度の研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初任者研修の先生方が多いことから、もう少し噛み砕いた趣旨も提示していけるとよいのではないかと。</li> <li>・小中高の連携について情報を共有したい。</li> </ul>
○来年度の研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学校の実践を、各地区や各地方で情報交換できる機会をもつ。</li> <li>・レポートの形式を工夫し、「他校で実践するなら」という項目を新設するなどして、各校の研究の再現性を高める。</li> </ul>
○その他, 改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートの発表時間や当日が初見であるということを考えると、枚数を制限してもっと要点的な形式にしてもよいのではないかと。</li> <li>・教科アンケートについては、事前に記入できる項目が多いので、前日までに記入したものを当日持参する方向でもよいのではないかと。</li> <li>・研究テーマを県下に周知できるような工夫を考えたい。</li> </ul>

## VI あとがき

本年度も県下各地より多くの先生方にご参会いただきました。お集まりいただいた先生方のレポートには、生徒のコミュニケーション能力の基礎を育成するための具体的な手だてや、教科のあり方についてまとめられたものが多く見られました。先生方の日々の実践に基づいて生徒の具体的な姿から熱心に協議を深めていただき、明日からの実践に役立つ大きな成果をあげて研究会を閉じることができました。

今年度も4分科会での開催となりました。先生方の積極的なご発言等により、活発な討議となりました。終日にわたって参加校の研究内容と今後の方向についての的確なご指導、ご助言をしてくださいました指導者の田中 幸一先生、細江 洋司先生、桐井 誠先生、清水 秀明先生、レポートをくまなくお読みいただき、綿密な司会計画により協議を深めていただきました司会の宮澤 修一先生、飯島 廣樹先生、嶺村 岳先生、西村 晃洋先生、また、当日の記録及び研究集録のまとめに多くの時間を割いてご尽力いただきました記録の笠川 麻由香先生、上野 大先生、佐藤 大樹先生、高見澤 益子先生に心より感謝申し上げます。そして、お忙しい中、日々の実践をレポートにまとめ、熱心に協議に参加され、研究会を実りあるものにしてくださった参会の先生方に心から感謝申し上げます。

来年度も多くの先生方が参加され、英語教育のあるべき方向を求めて、より有意義な研究会にさせていただくことを願い、また、先生方の今後の一層のご活躍を祈念申し上げ、御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

委員長 橋爪 祐一  
副委員長 津金 俊文